

# 近代

一

前田勇氏の「近世上方語辞典」(東京堂<sup>昭和39・4</sup>)をまずとりあげてみよう。すでに紹介されているようにこの辞典は三百年にわたる京阪語の日常語二万五千語を収録した文字通りの労作である。(書評・鈴木勝忠氏「岐阜大学学芸学部研究報告」など)近松・西鶴といった特定の作者の辞典でなく、上方語一般の辞典であり、しかも史的な流れを考察し、特にこれまで殆ど顧みられなかった宝暦以降の後期上方語を採り上げてある点は画期的である。またそれが江戸語に對立する言語としての上方語という把握のしかたで、現行の上方方言の史的な裏付けを与えることを目的として編まれたところに意義がある。先年の山崎久之氏の研究(国語待遇表現体系の研究・近世篇)もこれと同じであるが、いままでの近世語の通時論的考察ではとかく前期は上方語、後期は江戸語という方法をとりがちであったからである。近代語史研究の分野の広がりと同時に新たな出発とを感じる。引きつづいて刊行の「上方語源辞典」(東京堂<sup>昭和40・5</sup>)は明治・大正・昭和三代の京阪市民語の語義・語源・語史を集成したものの(書

金田 弘

評・前田金五郎「言語と文芸」43)なお語彙に関しては両辞典に批評をよせて雑俳・語学書その他いま一つ幅広い資料の捜査活用を期待する人々の中で前田金五郎氏に「恨の介」「竹斎」などの「仮名草子」(日本古典文学<sup>大系</sup>40・5)「浮世物語雑考」(国語国文<sup>34</sup> | 6)「百物語雑考」(言語と文芸<sup>40</sup>)が、鈴木棠三氏に「醒睡笑」(角川書店<sup>昭和30</sup>・8下1039)が、中村幸彦氏に「ひとりね」「孔雀楼筆記」(近世随想集所収<sup>昭和9</sup>)が、また、森田武氏に、「伊曾保物語」(日本古典文学<sup>大系</sup>所収)がある。そこに示された詳細な注釈作業の成果は諸氏の精緻な用例採集の一端が披露されたにすぎないものであろうが、これで、とかく手薄と云われてきた近世語彙研究の今後の見通しはきわめて明るいものになってきたといえよう。

鈴木丹士郎氏の「『かまびすし』の活用とその意味」(国語学<sup>62</sup>)は「かまびすし」がク活用からシク活用に變化した例を中世から近世にかけて追跡し、その語の性格を明らかにした好論である。氏の論考の特色は一貫して中世・近世の文語が中古の文語の伝統を受け継ぎながらどのように変容されてきているかを追究しようとする

るところにある。先年、近世文語研究の必要性を時枝誠記氏は説かれたが、鈴木氏によって口語に比べ貧弱であった近世文語の性格と実相が次々と明確にされてきていることを注目したい。すなわち、(1)「サ変動詞の助動詞『き』への接続面の混乱——馬琴における文語の一問題——」(『文芸研究』47)(2)「馬琴の文語——形容詞カリ活用の場合」(『国語学』60)(3)「下二段動詞の四段化——近世における口語の文語への混入——」(『国語学研究』5)。(1)はサ変動詞に「き」が接続する場合「シシ形」をとるものが多いが、それはサ行四段の「シシ形」に引かれたとする論証。(2)は補助活用のカリ活用が近世になって主活用化現象を生じていたことを述べたもの。(3)はサ行下二段が四段化している例を挙げ、口語的要素の文語への混入を問題にしている論である。近世文語におけるいわゆるゆれのある言語現象を捉えてその実相に迫ろうとする研究と云えよう。しかしその実相が「中古文語意識の変容」(いかにもたしかに文語で書かれているという感じを与える文語)とか「文語めかし」と説かれてもなぜそうだったかの理由・原因については必ずしも明確に示されているとは云えない。また氏の対象とする「近世文語」が馬琴に中心がおかれていることにも問題があろう。

山崎久之氏の「江戸前期文語の待遇表現」(『群馬大学紀要人文科学篇』4ノ7)は主体待遇の助動詞・補助動詞を扱った論であるが、ここでの「文語」は「浄瑠璃」や「絵入狂言本」のいわゆる地の文をさしている。「近世文語」については吉田澄夫氏の用字上・文体上から眺めた考え方はあるが、今後その規定のしかたや取り扱い方をめぐって論議を呼ぶことと思われる。

中村通夫氏の「後期近世語研究の新分野」(『中央大学文学部紀要

文学科』17)においても近世文語の研究が今後の重要課題となることが指摘してある。もっとも鈴木氏のと異なる現代共通語とのつながりを強調し、近世語中、現代共通語と性格の類似しているものは第一に近世文語であり、ついで漢学者の講述用語(講義・説教・口上)が挙げられるとしてここでその資料の一端を紹介された。これらの資料は従来ほとんど顧みられなかったものであるが、各種文語に比して口語的要素を帯びており、その点現代共通語に最も近いことからして、現代共通語の成立——特にいわれるところの明治初期の下町ことばから山の手ことばへとという位相差——の解明に今後大いに活用されることになろう。またこのような捉え方はこれまでの「後期近世語から現代語の推移を江戸語から東京語へ」という形でのみ説明しようとする「方法」に対しての反省または警告を意味しており、今後の研究に示唆するところ大である。「近世文語」の性格について以上のような実相の解明なり、位置づけなりが行なわれたことはこの年度の特色の一つとして挙げておいてよいだろう。

## 二

このような、いいかえれば従来の研究の反省を土台にしての新分野の開拓、または新しい方向づけが行なわれた時に近代語学会編の「近代語研究・第一集」(武蔵野書院、昭40・9)が誕生したが、このうち田中章夫氏の「近代語成立過程にみられるいわゆる分析的傾向について」は分析的傾向(種類の少ない単純な表現単位のコンビネーションによって、複雑・微妙な表現を成立させようとする傾向)は近代語の成立過程のなかでも特に現代語の成立過程においてみられるが、それはまた東京方言が共通語として語法体系の異なる各地方言との激

しい接触を持ったことも一因と考え、通時的な意味ばかりでなく、共時的な意味も認める要ありとする論である。前記中村氏の現代共通語に最も多くの遺産を残したのは後期近世の文語であり、したがって現代共通語の根幹をなしているのは特定の地域語そのものではないとする論と噛み合わないのは、近世語から現代語への推移の捉え方の相違によるうが、この事についても今後いろいろな立場からの発言や問題が提起されることと思う。たとえば、飛田良文氏に「和英語林集成におけるハ行四段活用動詞の音便形」〔国語学〕56〕の論がある。これはハ行四段の音便形がウ音便形から促音便へ移行するのは東京語が江戸語から独立していく過程を反映しているとし、「和英語林集成」を中心とした同時代の資料を比較検討してその実態を明らかにしたものである。これについて小島俊夫氏は「後期江戸語におけるハ行四段活用動詞の音便形について——人情本滑稽本などを資料として——」〔国語学〕62〕で、ウ音便消滅過程を捉えるには「和英語林集成」より人情本・滑稽本の方が資料としてすぐれていることを述べ、両資料の間には大きな違いのあることを論証し批判しているが、しかしこれは小島氏の云うところの資料の適否という問題でなく、資料の扱い方に関するものであり、前述の現代語の成立過程をどう捉えるかの態度の相違にもとづくものと考えられる。

ともかく現代語の形成期ともいえる江戸後期から明治初期にかけての研究は近時特に盛んでこの年度にもすぐれた論考を数多く生んできているが、まずその筆頭に挙げなければならないのは山本正秀氏の「近代文体発生の史的的研究」〔岩波書店〕（昭40・7）であろう。戦前から一貫して追究されてきた言文一致文の成立過程を精細に示した文字通り

の労作である。（書評・杉本つとむ「解釈と鑑賞」30の14など）今後はこの研究を基礎にしての近代文体史上に見られる語彙・文法など各分野からの研究が行なわれることであろうが、特にこの期の語彙（特に漢語）については、黙阿弥の散切物を中心に書生言葉を取りあげて概観した杉本つとむ氏の「転換期の日本語——江戸から東京へ——」〔近代語研究〕をはじめ精細な分析と考察を行なった好論がいくつかある。磯貝俊枝氏「明治初期における漢語の研究——『和英語林集成』を通して見た漢語の推移——」〔東京女子大〕（日本文学）22） 飛田良文氏「和英語林集成の語彙の性格——江戸後期の節用集との比較から——」〔文芸研究〕50） 進藤咲子氏「小説の地の文における漢語サ変の量——江戸・明治の五つの作品の場合——」〔計量国語学〕28）など。磯貝氏のは「和英語林集成」の初版から三版にいたる二十年間の語彙体系を調べ、明治初期に急増した大量の漢語の採用および整理を分析、現代漢語の成立の事情および構造上の特質を捉えた手堅い考察。飛田氏のは「和英語林集成」の原典が「日葡辞書」「和英語彙」のほかに「大日本永代蔵節用無尽蔵」を中心として数種類の節用集を使用したのではないかを推察した克明な論証。進藤氏のは、地の文の漢語サ変の量的調査を行ない会話文との対比を試みたユニークな論考である。飛田氏にはなお「和英語林集成『和英の部』について」〔文化〕27）をみる。額田淑氏の「栄養考」〔国語学〕61〕は「栄養」という語がどのように国語の中に取り入れられ、どのような過程を経て浸透していったかを追跡調査した論で興味深い。昭和39年度「国語研究所年報」16には明治時代語の調査研究として、明治初期文献の用字調査などの報告、また「同研究所論集」2（昭40・3）には進藤氏の「明治初期かなづかい様相」広浜文雄氏の

「複合してサ変の動詞を作る漢語の意味分類(1)」の論がある。

なお従来の研究の成果をもとにして江戸語——東京語の流れをまとめたものに松村明氏の「東京語の成立と展開」があり、これを収めた「講座現代語第二巻」(明治書院)には「言語生活・文字・表記・語彙・文体・文章・敬語」の変遷についての諸氏の論がある。また前年来続けられてきた「日本語の歴史」(平凡社)が「4 移りゆく古代語」(昭39・7)「5 近代語の流れ」(昭39・11)「6 新しい国語への歩み」(昭40・5)を刊行したことも付け加えておく。

### 三

前記「近代語研究・第一集」の巻頭論文、吉田澄夫氏の「近代語研究の現段階」はこれまでの近代語研究の回顧と近年刊行された資料や研究を紹介したものである。ここで氏は「索引」「辞典」作製のほか、研究資料の探査発見を望んでおられるが、この両年度には新資料の紹介・位置づけ、またそれらを活用しての研究も目だった。

外山映次氏「天南代鈔について」(鹿児島大学教育学部紀要)16)、金田弘の(1)「不出戸なる洞門抄物」(近代語研究)(2)「『でや』とある洞門抄物」(日本文学論究)24)、(3)「洞門抄物『報恩録』」(文学語学)33)はいずれも東国語関係の抄物の紹介である。外山氏のと筆者のと(1)は同系・同時代という共通した性格を持つ抄物であるが、外山氏のは聞き書きを講者自らそれに識語を認めたものという点で価値がある。(2)は万安の二つの抄に断定の「デヤ」表記の見られることを報告し、その抄物の性格を論じたものである。「おあん物語」の「あらない」については吉野 忠氏の「おあんなし」とその言語」(高知大教育学部研究報告)17)によって一応の解決

をみた。ここでは諸本を検討した結果「土州本」こそ注目されるべきことが述べてある。なお中世末については山内洋一郎氏「田植草紙の語法二三——まいする・まんするなど」(田唄研究)7)「連歌賦物集『うたづゑ』について——国語資料として紹介」(中世文芸)30)をみる。

近世中期以降では吉川泰雄氏の「談義本の江戸言葉」(日本文学論究)24)がある。談義本が宝暦期の江戸言葉の有力な資料となること、また当時の江戸言葉は上方語系のものが東国語系を圧し、存外広い階層にわたって用いられていたという指摘は注目される。これに関連あるものに心学の言語資料としての価値などを論じた真下三郎氏の「心学」(国語と国文学)41の4)がある。池上秋彦氏の「江戸小咄について」(近代語研究)は談義本同様、今まで江戸語資料としてあまり顧みられなかった江戸小咄を取り上げ特徴的な言語現象を論じたものである。中村幸彦氏の「近世語資料としての詞葉新雅」(語文研究)18)は「詞葉新雅」の里言辞書としての価値を述べ、あわせて従来の近世語研究の反省、今後の方向を資料の扱い方の面から述べた示唆的な論考である。この辞書については建部一男氏の「『詞葉新雅』の里言と雅言」(論究日本文学)22)の論をみる。なおほかに江戸作家の引札宣伝文を紹介した鶴月 洋氏の「江戸時代の宣伝文——とくに作家の書いた引札について」(近代語研究)という論考もあった。

近世後期の外国資料の紹介も盛んで、松村明氏「羅尼著『和法会話対訳』について」(近代語研究)、三沢光博氏「囉尼の『日本語考』(語文)21)がある。松村氏はこの会話書には江戸語の発音についてのまとまった記述がみられること、またその例文が武家と

とは系列の資料として注目されることを述べ、かつ同じ著者の「日本熟語」との関係についても触れたものである。松村氏には他に一般にはまだよく知られていない邦人の編述になるロシア語関係の書を紹介した「幕末期ロシア語学書についての覚書」(「文学・語学」33)があるが、従来とかく口頭資料として無批判・無差別に取り扱われてきた洋学資料に種々の角度から精密な検討を加えて、資料的価値の有無、またその位置づけに心を注いでおられることが注目される。なお「蘭東事始」(「日本古典文学大系」95・昭39・10)に示された注(特に補注)は今後の洋学資料の研究に益すること大である。三沢氏にもほかに「ホフマン日本語文典(翻訳)一」(「日本大学文学部(三島)研究年報」12)がある。古田東朔氏の「幕末期の翻訳草稿二つ」(「文学語学」33)はいわゆる欧文直訳式の文章がいかにして成立したかを邦人翻訳の草稿二つを挙げて考察したものである。

外国資料に関連あるものとして村山七郎氏の「漂流民の言語——ロシアへの漂流民の方言学的貢献——」(「語学」40・4)の刊行がある。これについては日野資純氏の評(「国語と国文学」42の11)にゆずるが、氏には他に「薩摩漂流民ゴンザ(権左)の事蹟」(「日本歴史」192)、「ソ連における日葡辞書の存在」(「国語国文」34の3)がある。

かような新資料の紹介や位置づけが行なわれる一方、これまで紹介されてきた資料の再検討、またはそれらに基づいての論考もいくつか出ている。まず「天草本平家物語」の原典をめぐっては、清瀬良一氏「天草本平家物語の原拠覚書」(「国文学攷」33)麻生朝男氏「天草本平家物語——卷二の二から卷三までの底本について」(「佐賀大学文学部人文紀要」1)風間力三氏「天草本平家物語の

口訳原典(上)」(「甲南大学文学会論集」28)の三つの論考があった。いずれも古典平家の諸本と対比し詳細な論証がみられる。風間氏のはまだ(一)だけであるが、三論共通していることは、一定の底本を求めることは困難であり、一つ一つの文を捉えても一元的に説明することのむずかしさにあるようである。平家に関しては「平家正節」を語学資料としてとりあげた足立弘子・久瀬美代子・森山良子の三氏の「『平家正節』の研究」(「国語国文学」3)がある。

クリンシタン関係では他に入江清氏の「バルベルニ文庫蔵どちりいなきりしたん雑考」(「国語国文」33の1)「聖教日課雑考」(同、34の1)鎌田広夫氏「クリンシタン語法覚書——パレット写本集から——」(「日本文学論究」24)中出惇氏「ロドリゲス日本文典におけるウ・ウズ・ウズルの用法——時・法を中心として——」(「愛知大学国文学」6)麻生朝道氏「クリンシタン口語資料に於ける否定を伴う副詞」(「語文研究」18)のほか安達隆一氏「天草版伊曾保物語の接続詞について」(「水門」5)をみる。入江氏のは両書の成立・系譜をめぐっての論考。鎌田氏のはパレット写本集の語法を中心にその言語現象を詳細に報告したもの。中出氏のは、ロドリゲスが文法範疇の一つとして「時」「法」を理解していたとするなら、その中でこの助動詞のつかみかたに混乱があるとした論。麻生氏のは天草本平家を中心にして、「平家物語の語法下」に示された副詞、示されない副詞についての詳細な検討を加えたものである。なお鎌田氏には他に「三河物語の語法」(「語学文学会紀要2」)がある。

抄物関係では大塚光信氏の「史記抄の諸本と本文」(「国語国文」33の5)がある。現存諸本を紹介し、これら諸本の本文を比較してそれぞれの性格を定めようと精細な検討・考察を行なった好論であ

る。亀井孝・水沢利忠両氏の「史記桃源抄の研究(本文篇一)」(日本學術振興會)は大塚氏が誤字の存在は認められるが、書写の古さ、伝来のたしかさ、それに完本であることをもって現存諸本中もっとも注目に値するとされた京大図書館本を複製したもの。複製では春日和男氏解題の「玉里節用集」(西日本国語国文学会、文庫)がある。なお「節用集」に関しては亀井孝氏編・高羽五郎氏印刷「五本改編節用集(5)・(6)」(昭39・4・8)・渡辺綱也氏「明応本節用集仮名索引(5)」(人文科学学研究所)25)を見る。なおまた、いわゆる古本節用集と近世開板の節用集についての門の排列を調べたものに佐藤茂氏の「節用集の門の排列についての一考察」(国語学研究所)4)がある。

外国資料としては井上章氏の「天草伊曾保物語」(風間書房)と「慶長五年耶蘇会板倭漢朗詠集」(研究室編・昭39・12)がキリシタン関係で、朝鮮関係では京都大國語国文学研究室編の「弘治五年朝鮮板伊路波」(神原勇造・浜田敦・河野六郎・福島邦道・昭40・7)「全一道人の研究」(安田章・昭39・10)「日本寄語の研究」(福島邦道・浜田敦・昭40・10)が刊行された。なおすでに刊行された「捷解新語」をめぐる、安田章氏「朝鮮資料覚書——捷解新語の改訂」(論究日本文学)24)伊奈恒一氏「捷解新語に現われた敬語について」(語文)21)浜田敦氏「『が』と『は』の一面——朝鮮資料を手がかりに

——」(国語国文)34の4・5)の三つの論考がある。安田氏のは朝鮮資料についての性格を説いたもの。伊奈氏のは敬語の接頭辞・助動詞を整理・考察したもの。浜田氏のは「捷解新語」をはじめ数種の資料によりわれわれの目からはおかしな「が」と「は」を捉え、それぞれの本質的な用法を明らかにしようとした注目すべき論考である。先に挙げた京大刊行の外国資料にはそれぞれ解題のほ

か、語学資料としての解説もあるが、今後はそれらを活用した論考が次々と生み出されていくことと思われる。

索引には渡辺綱也氏の「貞享補志記索引」(国語研究室)別刷2)がある。また「近代語研究第一集」の中に江戸時代に関しては福島邦道氏の、明治以降については古田東朔氏の作成された「近代語研究文献目録」という貴重な仕事があったことを附記しておく。

なお方言に関したものは斎藤義七郎氏「江戸期方言資料としての庄内地方郷土本」(近代語研究)と篠崎久躬氏「幕末期佐賀地方に於ける『カ』語尾——滑稽洒落一寸見た夢物語を中心にして——」(国語学)56)がある。斎藤氏のはすでに紹介された郷土本の語彙・語法を摘出、整理し、新資料「子之助夢ものがたり」を紹介したものである。なお、氏には他に「浜荻に拾う江戸語」(言語と文芸)32)がある。篠崎氏のはカ語尾はもっぱら形容詞の語尾として幕末期の佐賀藩内で自由に使われていたことを述べたものである。

#### 四

次に今までに触れ得なかった論考について分野別に眺めていくことにしたい。

まず音韻の分野。他に比して数が少なく、アクセントに関したものに集中している。桜井茂治氏の「世阿弥の能楽書とアクセント」(国学院雑誌)昭40・2・3)は、世阿弥がアクセントについて強い関心を抱いていたことを述べ、能楽書におけるアクセントに関する記載を解説したもの。同題のものに前田富祺氏の「能楽論におけるアクセント」(国語学研究所)5)をみるが、桜井氏には他に「助詞アクセントの史的考察——『単語連結』から『単語結合』へ」

〔国語国文〕34の2)「助詞『は』の発音について——声明の伝承音とその音韻史的解釈」(『国語と国文学』41の8)という古代語から近代語にかけての通時論的考察がある。前者は鎌倉から室町期にかけてが「単語」連結から結合へ移る過渡期で、それが安定的結合になっていくのが室町時代であると助詞のアクセントを捉えて考察し、「補忘記」はそうした結合の段階を写した資料と説く。その「補忘記」をめぐっては川上 肇氏にまず「段階アクセントから方向アクセントへ」(『国語国文』33の2)の論がある。ここでは補忘記アクセントの考察から、補忘記のアクセントは段階アクセントであり、それから現代京阪アクセントへの変化を段階性からの離脱という重大な変化とみる事が可能と説かれた。その後、山口幸洋氏は「段階性アクセントはありえたか——補忘記アクセントによせて」(『国語研究』18)で補忘記アクセントは純粋な段階アクセントでなく方向性を有するアクセントと主張されたが、川上氏はこれを受け入れ「平安アクセントと補忘記アクセント」(『国語国文』34の2)では補忘記アクセントと現代京阪アクセントとは本質的に同じアクセントであることを論じられた。氏の方向アクセント観をもって、アクセントの史の変遷を説明しようとする試みであろう。他にこの分野では権藤田立氏の「真宗声明に於ける読唱のいろいろ」(『近代語研究』)がある。なお文字について触れると佐藤 茂氏「室町期のイ、キの文字づかい」(『福井大学学芸学部紀要人文科学』13)をみる。

文法の面ではまず湯沢幸吉郎氏の「廓言葉の研究」(明治書院<sup>昭和39・44</sup>)が挙げられようが、真下三郎氏の書評(『国語学』58)にゆずる。

文構造に関しては寿岳章子氏の「抄物の文構造」(『文学語学』33)と佐藤喜代治氏の「文構造から見た芭蕉の俳文」(『文化』27の4)

がある。寿岳氏のは述語にかかる文節を末尾とする連文節を一次成分として抄物の文構造の特色をとらえようとしたものである。

名詞では池上秋彦氏「人情本に現われた一・二人称代名詞」(『鶴見女子大紀要』2)がある。人情本に見られる代名詞を位相面から考察したものである。感動詞では、義大夫の丸本では感動詞がかたかなで表記されていることに着目し、作品の年代を推定しようとする安田喜代門氏の「感動詞の認識」(『近代語研究』)と否定問いかけに対する応答詞を問題にした小松寿雄氏の「狂言における否定問いかけに答える応答詞の用法」(『近代語研究』)がある。

助動詞では、俳諧を資料として、可能・自発・受身・尊敬の「る」の交錯する相を説明しようとする高羽五郎氏の好論「助動詞『る』の用法」(前・昭39・5・後昭40・11自家版)をはじめとしていくつかの論がみられる。山内洋一郎氏の「助動詞『うず』について——連体形終止の異例について」(『広島大文学部紀要』23ノ3)は連体形終止の一般化の大きな例外現象となっている「うず」を共時的にまた史的に考察してその原因を追究した論考である。林田明氏の「候ふ」とその異形群(『近代語研究』)は「候ふ」の用法を抄物・狂言を中心に考察し、その語形変化の相を克明に調査したものの。吉川泰雄氏の「シマス・サシマス考」(同上)は「(サ)シマス」が「(サ)セオハシマス」に起源することを明らかにし、近古のこの助動詞の用法とその変遷のあとを述べたものである。いわゆる断定の「なり」については宮地幸一氏「移りゆく断定表現」(同上)と春日和男氏「なる」の意味変化——文法上許容に関する事項一六の場合」がある。宮地氏のは「なり」のゆくえから「である」と「だ」の発生とその発達を記述し、その漸移相を示したもので、春日氏のは「顔

回ナルモノ」のような「という」に相当する「なる」は近世の漢文訓読がもたらした特例であることとその訓法のなった原因を考察した論である。武井隆雄氏の「江戸語打消表現についての一報告——洒落本における『ぬ』『ない』『ぬ』『ない』両系統の相関」(『国語研究室』4)は場面の上方から「ない」と「ぬ」の相関を説き、用法の上で「ない」系列が「ぬ」系列をしのいでいたことを明らかにしたものである。敬語の助動詞では、吉川泰雄氏の「尊敬語を承ける『ます』の命令形に就いて——付『やんす』の説——」(『文学語学』33)と辻村敏樹氏「『です』の用法——近世語から現代語へ」(『近代語研究』)がある。吉川氏のは今日限られた用法でしか命令形のない「ます」も近世中期以前には各種の資料にわたってその命令法のみられることを示し、その成立の原理と「あります」から変容した「やんす」との交渉を考察したもの。辻村氏のは「です」が近世語から現代の標準的な用法へどのように脱皮してきたかを、主として接続及び活用 の面から解明した論考である。

ついでに敬語について触れると、山崎氏に前記論文のほか、「『お』ある』『おりやる』『やる』の変遷——近世待遇語の変化の傾向——」(『近代語研究』)がある。三形の室町から江戸時代にかけての言語事実を調べ、かつ江戸時代に入ってから用法を明らかにし位相面待遇価値の変化の傾向を示した。ロドリゲスの大文典の「お」ある」の記述の正確さをも指摘してある。都竹通年雄氏「『お』行ける」といいう方の歴史と分布(同上)は「お」ある」のその後の変遷にも触れてある論で、近世後期の京都方言の「お行ける」「お見る」の類の敬語動詞についてその語源・全国的分布について考察した。奥村三雄氏の「上方洒落本における文末敬語法」(『岐阜大

学学芸学部研究報告」13)は上方洒落本の尊敬法が明和期あたりを境に一変していることを明らかにしたものである。他に岸田武夫氏「近世語オシヤル・クダサルの系譜」(『京都学芸大学紀要』25)をみる。

助詞では浜田美代子氏「近松における助詞カ・ヤについて——その文法性的問題」(『大阪府立大学紀要』12)鎌田良二氏「世間胸算用の『の』が」(『甲南国文』12)吉野 忠氏「『ニシテ』から『デ』へ」(『高知大学教育学部研究報告』16)をみる。

語彙の分野に移ると、国田百合子氏「女房詞の研究」(『風聞書房』)と井之口有一・堀井令以知・中井和子の三氏の「尼門跡の言語生活の調査研究」(『風聞書房』)の刊行がまず挙げられよう。国田氏の著書についてはすでに真下三郎氏「(『国語と国文学』42の6)井之口有一氏(『国語学』61)宇野義方氏(『国文目白』4)の適切な紹介・書評があるが、女房詞は近世の婦人語につながるものであり、しかもそれが国語史上に果たした意義を論じようとした労作である。井之口有一氏たちの尼門跡の言語生活の実態を現在または歴史的資料にもとづいて究明したもので、必ずしも語彙だけにとどまるものではないが、巻末の語彙集(約一四〇〇)は国田氏のと合せて今後の婦人語研究に大いに役立つことと思われる。国田氏には他に(1)「女房詞と日葡辞書の婦人語との関係」(『近代語研究』(2)「敬語接頭辞と動作語・形容語との融合」(『文学語学』33)(3)「敬語接頭辞『御』と女房詞・婦人語との関係」(『国文目白』4)と意欲的な研究が続く。(1)は日葡辞書が婦人語研究史上貴重な資料となることを明らかにした。(2)は敬語接頭辞と他語の語構成を追究した論。(3)は女房詞・婦人語の領域における敬語接頭辞「お」の進出を考察したも



のである。井之口氏にも他に「尼門跡使用の御所ことばと『養藻屑』(『近代語研究』)がある。『養藻屑』所掲の御所ことば十八語と尼門跡使用の御所ことばとを比較し、かつその伝播の実態について述べたものである。

特定の語の意味・用法に関するものとしてはまず前田富祺氏の(1)「ハグムとハゴコム」「文芸研究」47」と(2)「イロコとイログツ」(『国語学』61)を挙げておきたい。(1)は才段とウ段の交替現象の実態を語形変化・語源意識の面から、(2)は両語形の関係・語義をめぐって通時論的に解明した力作である。語形と語義とのかわり合いを扱ったものには他に大橋紀子氏の「すしとすい——近世語における酸と粹」(『近代語研究』)がある。長尾勇氏「動詞「させる」について」(『語文』21)は現代諸方言の用法を考察し「奥の細道」の「させる」の意に及んだもの。峰倉清人氏の「狂言における『見まいな』と『見さいな』」(『国語学研究』4)は「見まいな」の成立とその意味を述べ「見さいな」との違いを論じたもの。他に盛田嘉徳氏の「賤称語源考」(『部落問題研究』15)浅田善二郎「おく様・おいゑ様・お内儀・おかさまなど」(『あや』4)をみる。

作品・作者の使用語彙を論じたものに今泉忠義氏「日葡辞書おぼえがき——その一」(『国語研究』21)柳田征司氏「室町時代の性向語彙について——虎明本狂言を中心として」(『国文学攷』36)宇野義方氏「能狂言の擬音をめぐって——『鐘の音』を中心に——」(『近代語研究』)などがある。今泉氏のは「日葡辞書」の見出し語をめぐってその語釈・表記のしかたの特徴をとらえ、また同時代語や現行各地方言とのつながりにふれた示唆に富む論。柳田氏のは狂言を中心として室町時代の性向語彙の体系とその特色とを究明しようと

したものの。宇野氏のは擬音の使用法からみて曲の種類・登場人物または流派による相違のあることを指摘し、さらにその固定化・類型化また語形の問題に触れて狂言の詞章の性格を考える上での一つの示唆を与えた興味深い論考である。なお他に寿岳章子氏の「抄物基本語彙」(『文芸研究』50)がある。六つの抄物を調査して基本語彙を選定、それがきわめて平凡なことはであることを述べた論である。

文体・文章の分野では「往来物」を文体の面で分類しその性格を示した真下三郎氏の「近世『往来物』の文体」(『広島大学文学部紀要』)現代語と江戸語の日常談話語の文の長さを比べ、また文の長さを規制する条件を考察した進藤咲子氏の「江戸語会話文の長さ——浮世床・梅児營養を資料として——」(『近代語研究』)三馬の特有な表現について説明した斯林不二彦氏の「式亭三馬の文表現——その若干の事象(同上)などがある。田辺正男氏の「源氏物語評釈の文体論的意義」(『国学院雑誌』昭40・7)は萩原広道のこの書が今日の文体論的研究に示唆を与えることを指摘した論考である。なお、氏の「国語学史」(桜楓社)は「歌学注釈学における歌格と文章法の研究」(「上代特殊仮名遣と鈴屋翁」の二章を増補し再刊(昭40・9)された。

国語学史の方面では佐田智明「『テニハ』と『詞』との関係——手簡葉大概抄之抄をめぐって」(『語文研究』18)岩田隆氏「宣長における『おを所属弁』の成立」(『文学語学』34)などがある。佐田氏のは今日一般に解釈されている「詞」と「辞」との対立関係をこの抄之抄に考察の中心をおくと、時枝氏の「国語学史」の中で説かれた次元とやや趣を異にするものがみられることを説いたもの。岩田氏のは「おを」所属の誤りを宣長が何時訂正したかを宣長の学問

の生成過程において実証的に追究した論である。寺田泰政氏の(1)「国学者鱸有飛・有鷹について」(「土のいろ」復刊22)(2)「宣長と遠江国学の国語研究」(「日本文学論究」24)(3)「ア行ヤ行のエ音分別研究史における鱸有飛の位置」(「国語研究」21)の三論文はいずれも遠江の国学者鱸有飛をめぐる研究で、このうち(3)では有飛の「四十八音略説」「四十八音義訳」という音韻研究書の紹介と、今まで知られていたア行ヤ行のエ音分別研究史の流れとは別にこの二書の研究を付け加えるべきことが説かれている。他に吉永亜美氏「連歌論における『てには』小考」(「女子大國文」32)日野資純氏「『まじじ』の研究史における『山口葉』(「人文論集」14)をみる。

与えられた「近代」については他の分担領域を考え合わせて、室町期から明治初期と仮に定めて扱ってみたが、見落した論文も少なからずあると思う。自らの研究経験や視野の狭さから自己本意な展望となったことと共に深くお詫び申しあげる。

— 国学院大学講師 —